



# 博物館から始める旅

～地域の特色あるミュージアム～

博物館は土地の歴史と人の記憶が集積され、現在そして未来をつくるヒントが詰まった宝庫です。日本全国に5700以上(\*)あるという博物館の中から、今回ご案内するのは、そこにしかないユニークな展示があり、地域が誇りとし、わざわざ出かける価値のある博物館ばかりです。旅の始まりは、まず博物館から。

\*博物館1,286+博物館類似施設4,452(文化庁ホームページより)。

2007年に完成した沖縄県立博物館・美術館、愛称「Oki Mu(おきみゅー)」。全国でも珍しい博物館と美術館を併設した複合施設で、沖縄の自然・歴史・文化・芸術を味わえる。建物は沖縄の城(グスク)をイメージしてデザインされている。(撮影:白木裕紀子)



天井が高く明るいホール。左手が博物館常設展の入り口で、中央にはミュージアムショップがある。

二次世界大戦後、戦争によって甚大な被害を受けた沖縄で、散逸してしまった文化財を収集・保存しようとした人々の功績から生まれたと聞く。そうした人々の手によって石川市(現うるま市)と那覇市首里にそれぞれ小さな博物館が生まれ、アメリカ統治時代にふたつの博物館がひとつになって琉球政府立博物館となり、ちょうど50年前、1972年の本土復帰にともなって、沖縄県立博物館という名称となった。首里にあったかつての博物館は50年あまりの長い間、地元の人たちに親しまれていた。

日差しがまぶしさに思わず手をかざして視界を守りながら、屋外展示の奄美式の穀物貯蔵庫の高倉や、沖縄の伝統的民家などを左手に見て、建物の入り口へと吸い込まれるように向かっていく。入場券売り場と受付コーナーの先は開放感のある大きなホールになっている。外観の印象とはまた違ったモダンな空間に、高い天井から自然光が筋を描いて降り注いでいる。そのロビーで、館内を案内してくれる広報営業担当の福治広規さんと学芸員の澤浦亮平さんが出迎えてくれた。

### サンゴ礁の海が迎える博物館常設展

さて、今日は博物館展示、中でも常設展示室を改めてじっくりと見ることを目的としてやってきた。沖縄は亜熱帯に属する島嶼域であるからその独自性を持つてい



## PART 1 地域を知る総合博物館

まるで島に上陸するような博物館の常設展示室へのアプローチ。足元にサンゴ礁が広がる。

戦争で散逸した文化財の収集・保存を目的に誕生常に更新されていく沖縄の歴史・自然・アート記録

# 沖縄県立博物館・美術館

[那覇市おもろまち]

Okimū (おきみゅー)

取材・文●長嶺陽子 撮影●白木裕紀子

### 「新都心の真ん中に」 「忽然と現れる白い城」

その日はよく晴れていた。沖縄県那覇市の「新都心」とも呼ばれる、おもろまち周辺地域。この一帯は広大な米軍住宅地が1987年(昭和62)にようやく返還された後に、新たな商業地として造成された場所だ。モノレール駅や免税店、大型ショッピングモールなどが立ち並びメインストリートの中ほどに、目指す場所、沖縄県立博物館・美術館は忽然と姿を現す。なめらかなカーブを描く、中東の砂漠の城のようにも見える外観。沖縄に移住して17年になる私には、2007年の開館当時に見た真新しいこの建物はオフホワイトでありながら「まぶしいほど白い」という印象だった。開館から15年目を迎えた今は、沖縄の強い日差しと海からの潮が混じった風雨にさらされて、少しずつ黒ずみ始めている。沖縄のグスク(城)をイメージした、シンプルながら厳かな雰囲気、来るたびになんとなく背筋が伸びる。

### 「全国でも珍しい」 博物館と美術館の併設

そもそも沖縄県の博物館は、第



1 自然史部門のヤンバルの森を再現したジオラマ展示。沖縄固有種の鳥や昆虫の鳴き声も聞こえてくる。2 ウミガメ、ヤンバルクイナ、蝶などはく製と分布図。3 旧石器時代の化石人骨、港川人の全身骨格をもとにして再現された模型。研究が進んだことで、顔つきや手にしている道具や生き物にも変化が生まれたそうだ。4 化石人骨の研究について熱く話してくれた学芸員の澤浦亮平さん。



ながみね・ようこ

2005年より沖縄在住の編集者、ライター。佐賀県出身。泡盛居酒屋を営みながら、沖縄県内を中心に取材、編集、執筆活動を行う。